

「進まぬ震災復興」

松島の感動さめやらぬ芭蕉と曾良の二人でしたが、その翌日にはこの旅の目的地「平泉と心ざし」旅亭を出発しました。だが、どうしたことか「路ふみたがへて」思いもかけず「石巻といふ湊」に出でしまいます。

石巻といえば背後に大崎耕土と呼ばれるわが国有数の広大な水田耕作地帯を持ち、そこで収穫された米は江戸幕府の財政を潤す富の源泉でありました。万石浦などと言う地名が今も残るように、ここで収穫されたモミは北上川舟運によって石巻に集積され、さらに千石船によって江戸に運び出されていきました。

芭蕉の目に映ったこの街の繁栄の姿は、『こがね花咲』とよみて奉たる金花山、海上に見わたし、数百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立つべけたり』（『奥の細道』）と言うほどのものでした。石巻の当時のにぎわいが目に浮かぶようです。

だが、あの天津波によるこの市の死者・行方不明者は4千人。被災市町村中最大の数を数え、当時人口の

2・5%にも上りました。

盛岡で開かれた会議の帰路、折しも岩手山に本州初冠雪のあった日、墓参に石巻を訪ねました。台風一過の強風に吹き飛ばされそうな荒れる一日でした。墓から下りて、石巻市内で最も多くの死者を出した海沿いの南浜、門脇町一帯をくまなく歩いてみました。災害直後の惨状はほぼ片づけられてはいるものの、背文を超える満開のセイタカアワダチソウが北風にあおられて津波のように葉裏を返していました。

話かわって1945年甲府大空襲の数日後。焼け出された親類の食糧補給のため父に連れられて見た甲府の街の情景を今はつきり思い出すことができず。一面の焼け野原にぽつぽつと建ち始めたみすぼらしいバラックに住みながらも、人々は「復興」に雄々しく立ち上がっていました。そこには、ある種の「希望」が子供の目にもはっきりと見て取れたものでした。

ここ石巻ではセイタカアワダチソウの黄金色の花がむなしく風に揺らぐだけ。復興のつち音は聞こえず、ただ北上を渡る木枯らしの声だけが聞こえていました。